

降臨節第1主日

2010/11/28

聖マタイによる福音書第24章37節-44節

於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

教会は大きな祝日の前には、その準備の期間を定めて守ってきました。大齋節はご復活日の備えの時であり、今日から迎えることになった降臨節は、ご降誕日の準備の期間です。大齋節が、元々はご復活祭に洗礼を受ける洗礼志願者たちの準備教育の期間であったように、降臨節も、まだクリスマスが祝われる習慣が始まる以前に、顕現日に洗礼を受けようとした志願者が、その準備をしたのがそもそもの始まりであったと言われていています。ですから、降臨節と大齋節の起源は、大変似通った同じような意図のもとに始められたとすることができるわけです。

降臨節は、その後、4世紀になってクリスマスが祝われるようになってからは、クリスマスを迎える準備の時として守られるようになり、現在の4つの主日とその期間となって定着をしました。

降臨節は「アドヴェント」と言いますが、この言葉の意味は「来臨」とか「到来」と言うことです。来る。来られる。救い主が来られる。今日の福音書にも、「人の子が来る」と繰り返し述べられています。人の子、即ち、イエスさまが来られる、その備えをするのが降臨節です。

待つと言うことに重点を置いて、降臨節を「待降節」と呼ぶ教会もあります。救い主であるイエス・キリストが来られる、その時を待つのが降臨節です。2000年前に、ベツレヘムの馬小屋で人となり、おとめマリアからお生まれになった神さまの独り子であるお方の誕生を、今年もまた祝うために、今日から準備を始めます。

しかし、クリスマスを年中行事として迎えるために準備をするではありません。信仰の事柄として、主イエス・キリストのご降誕を迎える備えをするのです。私たちは、そのことを良く弁えているのですが、日曜学校のページェントの練習に追われ、愛餐会の食事について頭を悩ませ、カードに書く言葉に神経を使い、プレゼントを選ぶことに関心が向き、具体的な準備にばかり気を取られ、そちらに心の多くを奪われます。勿論、それらのこともなおざりにはできません。しかし、何故、そのようにしてクリスマスを祝おうとするのか、そこを忘れないようにしたいと思います。

おとめマリアが天使のお告げに耳を傾け、自分に語られたみ言葉に思いを巡らしながら、聖霊によって宿った子の誕生を喜びをもって待ち望んだように、私たちもまた聖書のみ言葉に心を向け、み言葉を一人一人に内に宿らせて、み言葉に従う生活へと毎日の歩みを改めつつ、クリスマスを迎える備えとすることに、心を集中させたいものです。

クリスマスの出来事は、神さまが身を屈めて下さった出来事です。聖パウロは、初代教会のキリスト賛歌をフィリピの信徒への手紙の中に引用していますが、その賛歌には「キリストは神の身分でありながら、神と等しいものであることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になら

れました」(2:6-7)と歌われています。

神さまが、ご自分を空しくされ、徹底してご自分を放棄された姿を、ベツレヘムの幼子の中に私たちは見ることができるのです。弱く小さな嬰兒として人となって下さった神さまのへりくだりが、人間の救いのしるしです。この神さまのへりくだりは、苦難をご自身の身に引き受けて下さるためのものでした。十字架に向かうために人となり、ベツレヘムの馬小屋にお生まれになったイエス・キリストの姿の中に、神さまのみ心とみ業の実現が決定的な仕方では開始されたのです。

文語の聖書では、ピリピ書のキリスト賛歌の前の御言葉が、「汝らキリスト・イエスの心を心とせよ」(2:5)と訳されていました。自己に対するこだわりを捨てて、神のみ心に生きることを行動原理とすることこそが、おとめマリアの従順でした。降臨節を迎えご降誕の準備をする私たちも、「キリスト・イエスの心を心とする」生き方へと思いを巡らして、生活を改めることが第一の備えとなるのではないのでしょうか。

さて、降臨節のもう一つの意味は、キリストの第2の到来を待つと言うことです。先程捧げた今日の特祷は、「終わりの日に生きている人と死んだ人を審くために再び来られるとき」と祈りました。かつての文語の祈禱書では、この降臨節第一主日の特祷を、降臨節の期間中、その日の特祷と合わせて用いました。それは降臨節の基本的な主題が、終わりの日とか、最後の審判とか、イエスさまの再臨ということにあることを示しています。

初代教会の信徒たちは、キリストの再臨を明日にでも起こる切実な事柄として待ち望んでいました。使徒言行録では、復活されたイエスさまがオリブ山から天に上げられたとき、その場で天を見上げていた弟子たちに天使が現れて、今見たのと同じ有様で、またお出でになると告げました。初代教会の信徒たちは、「万物の終わりが迫っている」(Ⅰペテロ 4:7)ことをひしひしと受け止めながら、自分たちが生きている内に世界の終末が訪れ、キリストの再臨が起こることを信じて、緊迫感をもって生活を送ってきました。

しかし、時代が経るに連れて、いつまで待っていても、雲に乗って再び天から降ってこられるような仕方でもって、キリストの再臨が起こらないということから、世の終わりとか、キリストの再臨とかということが、おとぎ話か荒唐無稽の作り話であるかのように見なされるようになりました。終末や再臨に対する信仰が薄れていったのです。

それに対して、現代に於いては、終末の問題や再臨の問題こそが、キリスト教信仰の中心的な事柄で、キリスト教信仰を支える土台のようなものであることが再び認識され、強調されるようになって来ました。それは、世の終わりとかキリストの再臨という事柄が、時間の延長線上でのみ起こることだと限定することが、誤解であることを聖書から学んで気付いたためでした。終末や再臨を未来の事柄としてのみ理解することの過ちに気がついたのです。

世の終わりの時というのは、この世や私たち人間が創造された目的が完全に実現されるときのことです。神さまによって創られた万物が、その本来の姿を回復するときが世の終わりの時です。言い換えれば、世の終わりには、神さまの支配が完全に行われるようになるのです。神の国があからさまに出現するときが世の終

わりです。そして聖書によれば、その終わりの時は、イエス・キリストの到来と共に既に始まっているのです。イエス・キリストは終わりの時を、神さまの支配を、もたすために世に来られたのです。イエスさまの宣教の言葉は「神の国は近づいた」と言う宣言です。神の国がやって来た、神さまの支配がキリストと共に既に始まったと告げています。

しかし、その神の国は、未だ露わな形では実現していません。現在は、隠された形でしか現れていません。「今は、鏡におぼろに映ったものを見ている」(Ⅰコリント 13:12)とパウロは書いていますが、誰の目にも明らかな、はっきりした姿で神の国を見ることは、今はできません。しかし、そのような隠された形で進んでいる神さまの支配を見るのが、私たちの信仰です。

新約聖書の最後の文書はヨハネ黙示録です。ヨハネ黙示録が描く世界、それはこの世が終わり、悪の支配に終止符が打たれ、それに変わって出現する新しい天と新しい地です。新しい天と地、それは完全な神さまの支配への期待です。そこでは、「神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる」と描かれています(21:3,4)。

今、わたしたちの目にはイエスさまが共にいて下さることが隠されているけれども、世の終わりには、つまり人間が創造された本来の目的である神さまの御心に従って人が生活するようになったときには、今は隠れて共にいて下さるイエスさまが、あらわな姿でわたしたちと共にいて下さるようになることを描いているのです。そこにわたしたちの希望があるのです。そこに希望をおいて、今の生活を送るのがキリスト者の生き方です。

ヨハネ黙示録の最後のみ言葉はこのように書かれています。「以上すべてを証しする方が、言われる。『然り、わたしはすぐに来る。』アーメン、主イエスよ、来て下さい。主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように。」(黙示録 22:20-21)。

降臨節の祈りは、「マラナ・タ」、「我らの主よ、来たりませ」(Ⅰコリント 16:22)です。主イエスさまによって始められた神の国が、神さまの支配が、完全に実現し、すべてものが完成に至る救いの時を待ち望みつつ、主イエスよ来て下さい、とご一緒に祈りながら、この降臨節を過ごしたいと思います。